

幼児期の仲間関係に関する研究の概観と展望

—仲間関係に困難を抱える幼児に着目して—

Review of studies of peer relationships in early childhood: Focusing on the child who has difficulty in peer relationships.

松 本 恵 美*

Emi MATSUMOTO*

要 旨

本論文では、幼児期における仲間関係に関する研究について概観し、今後の研究の展望について考察した。はじめに、幼児期の仲間関係に関する先行研究を二者関係レベルとグループレベルに分類し、仲間関係の形成に影響を及ぼす要因について考察した。次に、仲間同士の相互作用の中で起こる「仲間入り」や「いざこざ」に関する研究を概観し、仲間との相互作用の中でどのように仲間関係を深めていくのかについてまとめた。最後に、仲間関係に困難を抱える幼児に関する研究を概観し、特に「外国人幼児」に焦点を当て、今後の研究の展開について考察した。今後の新たな研究の視点として、日本人幼児が外国人幼児を仲間として受け入れる気持ちに関する研究の必要性について述べた。

キーワード：幼児期、仲間関係、仲間集団、外国人幼児

はじめに

現在の保育・教育現場では、いじめや仲間外れと言った対人関係における様々な問題の解決が課題となっている。子どもたちにとって、一日の大半を共に過ごす友人や仲間集団との関係は、快適な生活を送る上で重要な位置を占めており、友人と良好な仲間関係を築けないことは、子どもの孤独感を高めたり自尊心の低下を引き起こしたりするとされている。そのため、これまで仲間関係の形成や仲間集団における受容と排除などに関する先行研究が多くなされてきた。特に幼児期における仲間関係は、その後の対人関係における基礎となるため、重要であると考えられる。また、幼児期は、心身の発達が急速に進む時期であり、社会経験の基礎となる仲間との関係の形成は、幼児の発達にとって重要な役割がある¹⁾。そのため、幼児期の仲間関係の形成を支援し発達を促進していくことは保育・教育現場において重要なことであると言える。

多くの幼児は、幼稚園や保育園、認定子ども園へ入園し、同年齢の多くの他児と出会うことで、大人との

関わりを中心とした世界から、同年齢の仲間との関わりを中心とした世界へと広げていく。仲間とは、相互に共通な関心によって選択され、共通の集団行動をとる同世代の他人のことを言う²⁾。そして、仲間が相互に抱えている意識を仲間意識といい、共通の関心をきっかけに集まった仲間と形成した小集団を仲間集団と言う。仲間としての相互選択には、相互に同世代であるということと相互に同等な社会的地位にあるという2つの条件があるとされている。これは、相手と世代が異なる場合や社会的地位が異なるような場合には、相互に社会的区別もしくは社会的距離を意識し、仲間意識を抱きにくいとされている。仲間集団は、対等な関係の他者と形成する集団であり、親や教師といった上下関係がある関係とは異なる重要な役割を持っている。仲間には重要ないくつかの機能があるとされており、その機能や役割は発達段階によって変化するとされている³⁾。幼児期において友人関係は、遊びにおける興奮と楽しみを増幅し、興奮した状態における行動の調整を助ける役目を担い、児童期においては、行動規範に関する知識の獲得および適切な自己

* 弘前大学教育学部学校教育講座

* Department of School Education, Faculty of Education, Hirosaki University

主張のスキルの獲得を助けるとされており、青年期においては、自分自身を見つめ直す手助けをし、感情や考えを統合するのを助ける役割を担っている。このように、子どもたちは、仲間との関わりを通して、社会性や対人関係において必要な社会的スキルを学んでいくとされている。

そこで本研究では、幼児期の仲間関係の形成に関する研究を概観し、幼児が良好な仲間関係を築いていく上で重要な要因について検討することを目的とした。また、仲間関係の形成に困難を示す幼児についても取り上げ、どのような支援が求められているかについて検討も行った。本研究では、仲間関係の形成に困難を示す幼児の中でも「外国人幼児」に着目し、今後の研究の展望について考察した。

1. 仲間関係の形成に関する研究

幼児期は、大人との関わりを中心とした関係から、同年齢の他児との関わりへと関係が広がる時期である。幼児は保育園や幼稚園で他児と出会い、一緒に遊んだりする中で仲間関係を形成していく。幼児期の仲間関係を取り扱った研究は、大きく2種類に分けることができる。一つは、二者関係のレベルにおいて仲間同士の相互作用を分析している研究であり、もう一つは、グループレベルにおいて仲間から受容される子どもの特徴についてソシオメトリック法を使用し分析していく研究である。

(1) 二者関係レベルにおける仲間関係について

二者関係レベルにおける仲間同士の相互作用を取り扱う研究では、子どもたちが仲間となっていく過程について事例研究が多くなされている。高櫻(2007)は、二者間における親密性の形成過程に着目し、3歳児が互いに親密性を形成し、深めていく過程について検討した。その結果、親密な関係が形成される条件として、双方が互いを選択する「自発性」、遊びに同等の立場で関わる「対等性」および相手に対して好意的にふるまおうとする「互惠性」の3つの獲得が重要であることを明らかにした。また、二者間に親密性が形成された後、二人の世界を発展させるために第三者への意識の広がりをみせることが示された⁴⁾。

一般に児童期以降の仲間関係と比較して、幼児期の仲間関係は特定の安定した遊び相手を持たず、遊び相手の選択は流動的であるとされてきたが¹⁾、親密度の高い仲間関係であれば、幼児期においても安定性が見

られることが示されてきている。謝(1999)は、二者間における安定した対人関係である「仲よし」や「親友」といった親密度の異なる仲間の形成過程について検討した。その結果、「仲よし」関係も「親友」関係も入園してから1か月半～3か月半の間に形成されること、より親密度の高い「親友」関係は「仲よし」関係よりも安定的で長く持続することを明らかとした。また、園での仲間関係の形成に「入園前の友達」が影響を与えていることも明らかとし、「入園前の友達」が新しい環境への適応を支えるアンカーポイントとしての役割を果たすことを示唆した⁵⁾。また、廣瀬ら(2006)は、幼児期の遊び相手の安定性には屋外場面か屋内場面かという物的環境によって変わると推測し、屋内外における幼児の関わる相手の安定性について検討している。その結果、物的環境による影響ではなく、年齢による仲間関係の安定性の違いが見られた。3・4歳児においては、遊び相手の選択は偶発的なものであり、近くにいたかどうかという近接性が重要であり、遊び相手が流動的であることが示された。しかし、5歳児になると近くにいた相手と偶発的に関わるのではなく、能動的に遊ぶ相手を選択し、安定的に関わる仲間の存在があることが明らかとなった。以上のことから、幼児期は、年齢が上がるにつれて親密性の高い安定した仲間関係を築いていくことが分かった⁶⁾。

しかし、これまで述べてきた研究は、すべての子どもたちが進級時に同一クラスに持ち上がる場合、もしくは同一クラスの年度内での変化について検討しているものあり、進級時に新たな仲間が加わるような場合に幼児の仲間関係にどのような変化がみられるかについての検討はなされていなかった。そこで、大島・中澤(2012)は、進級児と新入園児が混在する年中クラスを取り上げ、入園時期が異なる幼児が存在するという園の環境が幼児の仲間関係にどのような影響を及ぼすかについて検討している。その結果、年中児においては2年保育児より3年保育児が仲間として選択されることが示された。また、年中児・年長児の両学年において2年保育児は2年保育児を仲間として選択しやすく、3年保育児は3年保育児を仲間として選択しやすいことも示された⁷⁾。また、クラスに新人・進級児が混合するという園環境が幼児の仲間関係へ与える影響の持続性について検討した大島(2020)において、進級・新入という入園時期が異なる園児がいるという環境は新入児にとって少なくとも半年後まで影響を及ぼすこと、進級児にとってはこれまで形成してき

た仲間関係を不安定にさせる要因となることが明らかとなっている⁸⁾。以上の結果から、年齢によって形成される仲間関係の安定性や親密性に違いがみられること、幼児が他児を仲間として選択する際には、それ以前の仲間関係や関わる他児の入園時期が影響を及ぼすことがわかる。

(2) グループレベルにおける仲間関係について

グループレベルにおける仲間同士の相互作用を取り扱う研究では、仲間関係において受容されやすい子と拒否されやすい子を識別し、それぞれの子どもたちが示す特徴や対人関係における社会的スキルの違いを明らかにしてきた。前田・泉(1994)の研究では、5歳児クラスの自由場面において、仲間から受容される人気児と仲間からの受容が低い拒否児の行動特徴の違いについて検討した。その結果、人気児は仲間への肯定的な働きかけが多いこと、仲間と関わって一緒に遊ぶことが多いことが示され、拒否児は仲間と一緒に遊ぶことが最も少なく、並行遊びや一人遊びが最も多いことが示された⁹⁾。また、前田(1995)は、幼稚園年中児から小学1年生までを対象に仲間関係における地位と社会的行動特徴の関連について検討した。その結果、仲間から人気がある地位や拒否される地位は一度確立されると維持されやすいことが示された。特に拒否児は、攻撃性を持続しやすく、それにより仲間から拒否され、一層攻撃的になってしまうという悪循環に陥っている可能性が示唆された¹⁰⁾。さらに前田(1999)では、年長学年時点から小学5年生までを対象に幼児期の地位がどの程度維持されるかについて検討した。その結果、幼児期の人気児や拒否児の地位は、一度確立すると容易には変動せず、3年から4年後においても維持されやすいことが明らかとなった¹¹⁾。

これらの行動的特徴に加えて、仲間関係における地位に影響を与える要因として取り上げられてきたものとして、個人の社会的スキルの高さがあげられる。姜(1999)では、仲間関係における地位と個人のコミュニケーション・スキルとの関連について検討している。その結果、人気児は相手からの働きかけに対し適切に反応し、フィードバックをより与えていた。一方で拒否児は、仲間入りの場面においても仲間を受け入れる場面においても、フィードバックが少なく、仲間入り場面において、情報提供が少なく強い要求や命令を多くすることが示された。また、中澤・竹内(2012)の研究では、年長児の表情表出と仲間関係における地位について検討している。その結果、仲間から一緒に

遊びたいと選択されることの少ない幼児は、選択が多い人気児に比べて、ネガティブ情動の表出の頻度が多く表出時間が長い傾向にあることが示された¹²⁾。これらのことから、相手に適切にフィードバックをすることやネガティブ情動の社会的制御といった社会的スキルが、仲間からの受容度を高める重要な要因であることが示唆された。

仲間関係における受容と拒否に関する研究は、拒否される側の幼児の特徴に着目したものが多く、反対に拒否する側の幼児の特徴に着目した研究もおこなわれてきている。畠山・山崎(2002)では、攻撃タイプと仲間集団内の地位との関係について検討し、仲間集団内において中心的な地位にいる子どもは、間接的攻撃を多く示すことを明らかにした¹³⁾。また、磯部・佐藤(2003)の、関係性攻撃を顕著に示す幼児の社会的スキルを検討した研究においても、関係性攻撃を多く示す幼児は、教師に対して良好な社会的スキルを示しており、特に男児においては友情形成スキルが一般的に優れていることが示されている¹⁴⁾。さらに、畠山・畠山(2012)では、年少児から年長児を対象に、関係性攻撃と共感性・道徳的判断・社会的情報処理能力との間にどのような関連があるかについて検討している。その結果、関係性攻撃を行う幼児は、相手の感情を推測する得点が高いことなどが示され、社会的認知能力が高いことが示唆された¹⁵⁾。社会的スキルも高く仲間集団内においても高い地位にいるため、一見問題を抱えていないように見えても、他児に対して仲間外れや無視と言った関係性攻撃を示すリスクがあることを意識していく必要があることが明らかとなっている。

2. 遊びが幼児の仲間関係に与える影響に関する研究

(1) 「仲間入り」に関する研究

遊びが生活において重要な役割を果たす幼児期には、一緒に遊ぶことで他児との関わりを深め、仲間関係を形成していく。そのため、仲間と相互交渉を開始するきっかけとなる「仲間入り」に着目し、仲間入りの過程や仲間入りする際に有効な方略などについての先行研究がなされてきた。

倉持(1994)は、遊び集団への参加が成功したからと言ってそのまま遊び集団の一員になれるわけではないことを指摘し、仲間入りの過程について、遊び集団への参加という一時的な交渉のみだけではなく、仲間集団へ参加後に次第に遊び集団に統合されていく過程

までを含めて仲間入り行動について検討している。倉持（1994）は、仲間入りが成立するまでの過程に「遊び集団への参加」と「遊び集団への統合」という二つの段階を設定した。「遊び集団への統合」とは、仲間入りをする子ども側が仲間入りを果たした後に、遊び集団側との相互交渉を経て次第に遊び集団側に統合されていくことを意味する。分析の結果、仲間入りの当初は、遊び集団側から仲間入りをする子ども側への情報付与が多く、仲間入り側は情報付与より情報収集が多かった。一方、遊びが展開される後半には、遊び集団側と仲間入りする子ども側の双方が遊びに関する情報の伝達を同じように行っていることが示された。このことから、仲間集団への参加は、集団への参加で終わるわけではなく、その後の仲間へうまく統合できるかについても重要であることが明らかとなった¹⁶⁾。

また松井・武藤・門山（2001）は、仲間入りをはじめとする仲間との相互作用のはじまりについて検討し、仲間との相互作用をはじめの際に使用される方略は年齢や状況によって異なることを明らかにしている。幼児は、仲間との相互作用を始める際に、相手の活動への仲間入りという方略のほかに、自分がしている活動へと相手を引き込む方略やあ現在進行中の活動とは別の新しい活動を一緒に開始するという方略を使用していること、相手に「一緒にやろう」といった明示的に遊びに誘う方略と「ブランコあいてるよ」といった間接的な言い回しで暗黙的に遊びに誘う方略を使用していることが示された。また、方略の使用と年齢との関連についても分析し、3歳児前半には仲間の模倣をしながら一緒にいる状態が多いが、3歳児後半になると相手の活動への暗黙的方略を用いた働きかけが増加し、4歳の後半になると「いれて」「いいよ」といった典型的な明示的方略や、相手の自分の活動に誘い入れたり、自分に注意をひきつけたりする方略の使用が増加することを明らかにした¹⁷⁾。藤田（2016）は、松井・武藤・門山（2001）が明らかにした方略の違いに着目し、仲間との相互作用を開始するさいにどの方略がより多く用いられるのかについて検討している。その結果、仲間入り方略の方が仲間入れ方略よりやや使用数が多かったが、大きな違いは見られなかった。また、仲間入りと仲間入れ方略のどちらにおいても暗黙的方略が最もよく使用されることが示され、「仲間に入れて」や「一緒に遊ぼう」といった明示的方略はあまり使用されないことが示された¹⁸⁾。よって、相手の注意をうまくひきつけるような暗黙的方略をうまく使用できる幼児は、仲間入りにおいても仲間入れ

においても成功しやすく、仲間との良好な関係性を築くことができる可能性が示唆された。

砂上（2007）は、幼児の仲間入りに「同じものを持つ」ことがどのように関連するのかについて検討している。その結果、他の子どもと同じものを持つことは、一緒に遊ぶ仲間としてお互いに遊んでいる存在であることを認めることであり、仲間であるということと結びついていることが明らかとなった。また、他の子どもと同じものを使うことは、他の子どもと自分とのつながりを意識させることであり、仲間意識の共有と結びついていることも明らかとなった¹⁹⁾。このことから、保育・教育現場において、子どもが同じものを持ち、使用するということが仲間意識を促進し仲間関係を形成する上で重要な役割があることがわかる。

（2）遊びが仲間関係に与える影響

幼児は、仲間との遊びを通じて、仲間意識や仲間関係における役割を意識していくとされている²⁰⁾。そこで、遊びが子ども同士の関係に与える影響について検討している先行研究についてまとめていく。

湯沢（1991）は、5歳児が仲間の好きな遊びをどのように推測し、相手によって提案する遊びに違いがみられるかについて検討している。その結果、5歳児は好きな仲間は自分と同じ遊びを好むと考え、嫌いな仲間に対しては、自分の嫌いな遊びや一人遊びを好むだろうと考えることが明らかとなった。そのため、好きな仲間に対して遊びを提案する際には、相手も自分も好きな遊びを提案する一方で、嫌いな仲間に対しては、自分も相手も好きではない遊びを提案することが明らかとなった。また、拒否児は、人気児よりも嫌いな仲間に対して相手の好きな遊びに合わせないこと、一人で楽しむ遊びを好む傾向にあることなどが示された²¹⁾。よって、仲間に対して適切な遊びを提案できないことが、仲間関係を適切に維持できない要因であることが示唆された。また、田中（2005）は、鬼ごっこ場面を取り上げ、集団性のあるごっこ遊びが、幼児の仲間意識の発達にどのような影響を与えるかについて検討している。その結果、4歳児ではタッチするとオニとコの役割を交代することの理解が難しく、進行が困難だったが、5歳以降になると役割関係の理解がなされ、遊びの中でルールを対象化し、他者と共有することができるようになることが示された。また、6歳になると、複数の仲間を追いかけるようになり、逃げるコ同士の関係を意識しながら鬼ごっこを実施するようになることも示された。よって、6歳児は、より

複数の仲間を意識し、相手の追いかけ方、逃げ方を考慮しながら鬼の役割を行えるようになっていくことが明らかとなった。この結果から、年齢に伴い多くの仲間を意識して遊びに参加できるようになることが示唆された²²⁾。さらに磯村・鈴木(2019)は、5歳児の遊びの中で現れる姿から幼児の対人理解と仲間関係の関連について検討している。その結果、遊びの初期は、自分の関心や欲求が優先するため、他児に関心が向きにくい、遊びの中期以降は「他児の喜びを自らの喜びと感じる」姿が発言することが示された²³⁾。このことから、幼児は、継続して遊ぶ中で、他児の目的や気持ちを理解するようになり、他児と目的や気持ちを共有することにより仲間関係が深まっていくことが示唆された。

3. いざこざに関する研究

次に、幼児期の他児との相互作用の中で起こる「いざこざ」についてまとめる。子どもは、保育園や幼稚園に入園することにより、同年齢の他児と過ごす時間が増え、他児とともに生活する中で、他児とのいざこざも経験する。幼児は、他児とのいざこざを乗り越えることで、他児の気持ちに気づき、仲間関係深めていくとされている²⁴⁾⁻²⁷⁾。ここでは特に、いざこざで使用する方略に着目し、先行研究をまとめていくこととする。

倉持(1992)は、年長児がいざこざで使用する方略が、相手との関係性によって異なるかどうかについて検討した。その結果、同じ遊び集団に属していた相手と起きた「遊び集団内」におけるいざこざと、異なる遊び集団に属している相手と起きた「遊び集団外」におけるいざこざでは使用される方略に違いがみられることが示された。すなわち、遊び集団内のいざこざの場合、主に物を先取りしていることを主張する方略とそのものを所有することが現在の遊びでは妥当であることを示す方略を使用するが、遊び集団外のいざこざの場合、貸すための条件を示す方略と借りる限度を示す方略を主に使用していた²⁸⁾。この結果から、幼児はいざこざの中で使用する方略を相手との関係性の違いによって使い分けており、効果的な方略を選んで使用している可能性が示唆された。

また、相手との親密性や既知性によって、いざこざで使用する方略に違いがみられるかを研究した山本(1995)の研究においても、幼児は相手との関係性によって使用する方略が異なることが示されている。山

本(1995)の結果、相手のことをよく知っている場合には、幼児は仲良しではない子と比べて、仲良しな子に対して自己主張解決方略を多く使用することが明らかとなった。このことから、幼児は相手との関係性が安定していると自覚した時に、自己主張によって問題解決を行うことができることが示唆された²⁹⁾。

高坂(1996)は、3歳児がおもちゃをめぐるいざこざ場面において使用する方略について、言語的に主張する方略に加えて、相手と距離をとる・逃げるといった行動的方略も含めて検討した。その結果、子どもたちは言語方略以外にも、おもちゃを相手から遠ざける、おもちゃをしっかり握って離さない、おもちゃを持って走るなどの行動方略を多く用いていることが明らかとなり、3歳児がおもちゃの特性やいざこざ時の自分の立場に合わせて方略を変えている可能性が示唆された³⁰⁾。

山口ら(2009)の研究では、2歳から5歳児の子どものいざこざ場面を分析し、幼児のいざこざ原因・方略・終結の発達的变化を検討している。その結果、いざこざの原因は年齢によって違いが見られ、2歳児ではモノや場所の専有が多く、3歳児以上ではイメージのずれやルール違反の私的が多いことが示された。方略については、年齢が低いほど行動方略を使用する割合が高く、年齢が高くなると言語方略を使用する割合が高くなること、4歳児以降泣きやぐずりといった「不快な発声」が減少することが示された。終結については、年齢が上がるにつれ保育士の介入が減少し、子ども同士で解決する機会が増えることが示されていた。このことから、幼児のいざこざは言語発達と関連が深く、各年齢において段階的に発達していくことが明らかになっている³¹⁾。

利根川(2013)のいざこざに関する研究では、子どもたち自身でいざこざを解決していくようになるには、保育者による支えが重要であることを明らかにしている³²⁾。水津・松本(2015)の研究においても、いざこざにおける保育者の介入行動の重要性が示されている。水津・松本(2015)は、保育者のいざこざへの介入行動には、子どもの興奮や緊張状態を緩和し、自分の行動を振り返る場を作りだす機能と、子どものネガティブな気分を切り替え、状況を転換する機能の2つがあることを見いだした。このことから、幼児間のいざこざにおいて幼児の気持ちを和ませる保育者による介入行動は、幼児が気持ちを落ち着かせ、自分たちの力でいざこざを解決していく上で重要な役割を担っていることが明らかとなっている³³⁾。

4. 仲間関係に困難さを抱える幼児に関する研究

近年、仲間関係を形成する上で支援を要する子どもは多様化している。そのため、保育・教育現場では、多様化する子どもの課題や望みに合わせた適切な対応や支援が求められている。ここでは、仲間関係に困難さを抱えやすい子どもとして、「気になる」子および「外国人幼児」について取り上げ、先行研究をまとめていくこととする。

(1) 「気になる」子どもの仲間関係

「気になる」子どもとは、顕著な知的な遅れがないにも関わらず、「子ども同士のトラブルが多い」「自分の感情をうまくコントロールできない」と言った行動を示す子どものことである^{34) 35)}。本郷(2010)は、「気になる」子どもが示す特徴について調査し、その結果、「対人的トラブル」「落ち着きのなさ」「状況への順応性の低さ」「ルール違反」「衝動性」と言った5つの行動特徴が示されることを明らかにしている³⁴⁾。これらの行動特徴の内、とりわけ「対人的トラブルは年齢に伴って増加する傾向にあることが示されており、気になる子どもは年齢が上がるほど他児とのトラブルが発生しやすく、それにより仲間関係の形成に困難を示すことが示唆される。また、佐久間ら(2011)の研究では、特別な配慮を要する子どもの在籍について調査した。その結果、公立幼稚園の85.6%に特別な配慮を要する子どもが在籍していたことが明らかになっている³⁶⁾。原口ら(2015)の調査においても、調査対象として75の幼稚園の内、88%の幼稚園において障害の診断を受けていない気になる子どもが1名以上在籍していることが示されている³⁷⁾。これらの結果から、多くの幼稚園において対人関係に不安を抱える気になる子どもが在籍しており、保育者による気になる子どもに対する適切な支援が求められていることがわかる。本郷(2015)では、気になる子どもに対して適切な支援を実施していく上で、気になる子どもへの理解と子どもを取り巻く環境の理解に基づいた支援の重要性を指摘し、幼児が集団で生活する場における幼児の発達の状態を確認する「社会性発達チェックリスト」を作成している。このチェックリストでは、「気になる」子どもの発達をチェックするのみでなく、クラス集団全体の発達と特徴を理解することが可能となっている^{38) 39)}。攻撃的な行動特徴をもつ幼児は、仲間関係において拒否されるリスクが高いとされており⁴⁰⁾、「対人的トラブル」が多く「衝動性」が高い「気になる」子の場合、仲間から

排除されるリスクは高いと予想できる。そのため、保育者は、「社会性発達チェックリスト」などを活用して、対象児の特徴について正しい理解をするとともに、良好な仲間関係が形成できるように適切な対応および支援をしていくことが求められると考えられる。

(2) 外国人幼児に関する研究

近年、企業の国際化や労働力人口の減少に伴い、日本に在留する外国人の人数は増加傾向にある。特に2018年には、在留資格に「特定技能1号」「特定技能2号」が作られ、「特定技能2号」では、在留期限の上限がなく、要件を満たせば家族の帯同が認められたことにより、これまで以上に多くの外国人が家族を連れて日本で働くことができるようになった^{41) 42)}。法務省によると、2021年における在留外国人数は282万3,565人であった。在留外国人数は、2013から2019年の間は一貫して人数が増加しており、2019年には過去最高の293万3137人を記録していた⁴³⁾。2019年度以降は新型コロナウイルス感染症が世界的に流行したこともあり人数は減少傾向にあるが、新型コロナウイルス感染症の流行が落ち着けば、在留外国人が再び増加に転じる可能性が高いと考えられる。在留外国人数の増加に伴い、外国人の子ども数も増加し続けている。外国人の子どもは、日本語をほとんど話すことができないまま、幼稚園や保育園、小学校に通うことになる子どもも少なくないと考えられる。文部科学省が実施した「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入状況等に関する調査」によると、「日本語で日常会話が十分にできない児童生徒」および「日常会話ができて、学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加に支障が生じており、日本語指導が必要な児童生徒」は増加し続けており、2016年から2018年までの2年間で18.7%増加している(図1)⁴⁴⁾。

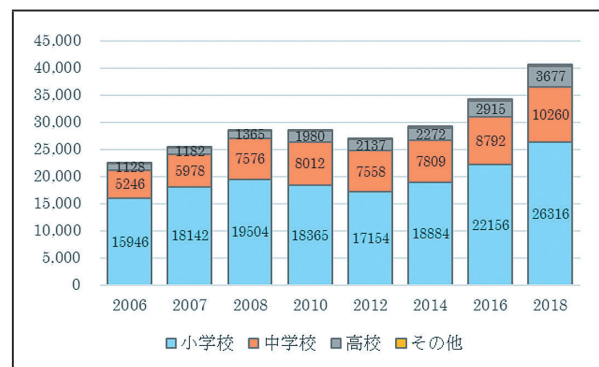


図1 日本語指導を必要とする外国人児童生徒数の推移
出典：文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入状況等に関する調査」より著者作成⁴⁴⁾

また、外国人児童生徒の母語が多言語化している。日本語指導を必要とする外国人児童生徒の母国語を見ると、ポルトガル語が最も多いが、中国語、フィリピン語、スペイン語、ベトナム語などが増加傾向にある⁴⁴⁾ ⁴⁵⁾。このように外国籍の子どもと言っても、子どもによって言語や文化が大きく異なることが分かる。よって、保育・教育現場では、外国人の子ども一人ひとりの言語、文化、習慣的背景を理解し、その子どもの状況にあった適切な指導や支援を行っていく必要があると言える。このことから、保育・教育現場において、多言語多文化背景を持つ子どもの現状を踏まえた上での対応や支援が求められる状況にあることが分かる。

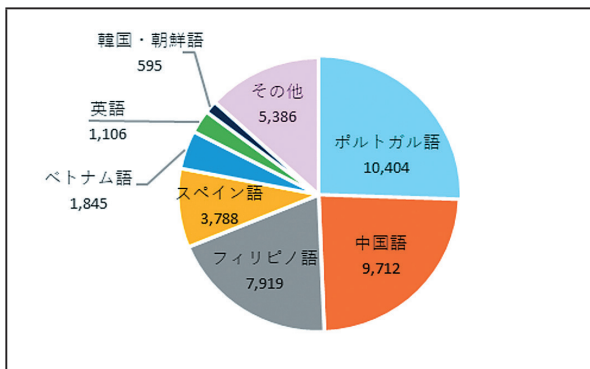


図2 日本語指導を必要とする外国人児童生徒の母国語別の在籍状況

出典：文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入状況等に関する調査」より著者作成⁴⁴⁾

外国人幼児が直面する課題として、「言葉の壁」や「文化の違い」があり、それらの課題によって仲間関係の形成にも難しさを抱えると考えられる⁴⁵⁾。外国人幼児は、日本語や日本の文化がわからないまま保育園や幼稚園に通うことになる子どもの少なくないため、クラスメイトとコミュニケーションがとれず、孤立してしまうリスクが高いと言える。Plenty & Jonsson (2017)によると、外国人の子どもは、文化や言語が異なるという理由から、クラス内で孤立しやすく、いじめの対象となるリスクが高いとされている⁴⁶⁾。そのため、日本語の指導や日本文化への適応を進めると同時に、クラス内で幼児が孤立しないように、外国人幼児と日本人幼児が良好な仲間関係を築けるように支援していくことが求められていると考えられる。しかしながら、外国人幼児の仲間関係の形成に関する先行研究はあまり多くなされてきていない。

中西・宮川 (1994) は、日本人幼児と仲間関係を形

成していく過程について、2名の日系ブラジル人の幼児の事例を取り上げて検討している。結果、入園時にほとんど日本語が話せない状態であった幼児も、日本人幼児と親密な仲間関係を展開していくことで、日本語会話能力や日本文化への適応が急速に進むことが示されている。また、外国人幼児の異文化適応において、同じクラスに自分と同じ国籍の外国人幼児がいることは良好な仲間関係を形成する上で重要な意味があることも示されている。中西・宮川 (1994) が取り上げた1つ目の事例では、同じクラスに別の日系ブラジル人がいたことで、その子が世話係のような役割を發揮し、日本人幼児に対しても早い段階で仲間関係が開かれたことが示されている。一方2つ目の事例では、同じクラスに同性の日系ブラジル人の幼児が3人いたことで、閉鎖性の高い3人グループを構成し、日本人幼児との仲間関係がなかなか展開されなかったことが示されていた⁴⁷⁾。同じ国籍や同じ母国語を話す仲間がいることは、母国語で不安や悩み、寂しさを共有したり、お互いを助けあったりするうえで重要な存在であると推測できる。しかし、同じ国籍や母国語を話す仲間とのみ交流している場合、異文化適応が停滞する可能性があるため、同国籍の子どもだけで展開される仲間関係を尊重し見守りつつも、日本人幼児と交流する機会やきっかけを与えていく必要があると言えるだろう。

また、宮川 (1996) では、外国人幼児が保育園に適応していくうえで重要な要因として「日本語能力」と「性格的要因」を取り上げて検討している。宮川 (1996) は、日常的なコミュニケーションに使用される言語が比較的単純な乳幼児は言語面での異文化の壁は児童や生徒と比べると厚くないと考えられるが、それでも異文化の壁を突破するのに日本語を片言でも理解していることが有利に働くと指摘している。また、外国人幼児の異文化適応が急速に進む理由として、幼児の未知の環境への積極性・社会性の高さ・対人スキルの高さを挙げており、これらが高い幼児は入園初期からクラスメイトと積極的に関わることが示されていた⁴⁸⁾。つまり、未知の環境への積極性・社会性・対人スキルが低い外国人幼児は、仲間関係の展開に困難さを抱える可能性が高いため、保育者からの支援がより重要になってくることが分かる。

また浜名 (1992) は、外国人幼児の仲間づくりにおける問題点を検討し、日本人幼児の母親が外国人幼児の母親へどのような態度を取るかということが幼児の仲間関係に影響を及ぼしている可能性を明らかにし

た。日本人の保護者が外国人の保護者に対し排他的である園では、幼児同士の関係においても、外国人幼児を積極的に仲間に入れようとする子がいなかった。一方で、外国人の保護者が日本人の保護者からすぐ受け入れられた園では、幼児同士の関係においても早い段階で仲間として受け入れられ、日本語や異文化適応が急速に進んでいた。このことから、自分たちと異なる特徴を持つ他者、目立つ他者を排除し、トラブルが起こる可能性があるものは避けてしまおうという日本人幼児の親たちの態度が、外国人幼児の親および子どもたちの異文化適応を困難にしていることが分かる⁴⁹⁾。

外国人幼児の仲間関係の形成に関する先行研究は、多くが事例を分析する質的な研究である。その中で、越中・前田(2003)は、外国人幼児の仲間関係について量な指標を用いて検討している。その結果、外国人幼児の異文化適応は時間の経過とともに「初期適応期－不適応期－回復期」という過程をたどること、日本語が上達することで他児に対する禁止や拒否を行うようになり、それが他児からのアプローチの減少につながることを示された⁵⁰⁾。

5. 今後の課題

本研究は、幼児期における仲間関係に関する先行研究について分類および整理し、どのような要因が幼児の仲間関係の形成に影響を及ぼすのかについて考察してきた。その中で、外国人幼児の仲間関係の形成に関する研究が十分に行われていないことが明らかとなった。特に外国人幼児に関する先行研究では、外国人幼児側の能力や状態について検討したものが多く、彼らを取り巻く日本人幼児側を対象とし、外国人幼児と仲間関係を形成する上で影響を与える要因について検討したものは見当たらなかった。外国人幼児の日本語力や日本文化への適応能力は日本人幼児と良好な仲間関係を築く上で重要な要因であると言えるが、日本人幼児側に受け入れる気持ちがなければ、関係の構築は難しいと考えられる。そのため、外国人幼児に対する支援方法について検討すると同時に、日本人幼児が自分と異なる文化や言葉をもつ外国人幼児に対して受容的になるよう指導・支援していくことも重要な課題であると言える。よって、今後の課題としては、日本人幼児を対象とし、外国人幼児を受け入れる気持ちがどのような要因によって影響を受けるのかについて検討を行うことが必要であると考えられる。また、年少・年中・年長といった年齢の違いによって、外国人幼児を

受け入れる気持ちに違いがみられるのか、幼児期において外国人幼児と良好な仲間関係を形成することは、その後の児童期や青年期に形成する仲間関係に影響を及ぼすのかなど、外国人幼児と日本人幼児との間の仲間関係の形成の発達の变化についても検討していく必要があると考えられる。

文献

- 1) 及川智博, 幼児期における仲間関係に関する研究の動向－個体能力論と関係論の循環の先へ－, 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 126, 75-99, 2016
- 2) 住田正樹, 子どもの仲間集団の研究, 九州大学出版会, 1995
- 3) Parker, J. G. and J. M. Gottman, Social and emotional development in a relational context: Friendship interaction from early childhood to adolescence, *Peer Relationships in Child Development*, 95-131, 1989
- 4) 高櫻綾子, 3歳児における親密性の形成過程についての事例的検討, *保育学研究*, 45 (1), 23-33, 2007
- 5) 謝文碧, 新入幼稚園児の友達関係の形成, *発達心理学研究*, 10 (3), 199-208, 1999
- 6) 廣瀬聡弥・志澤康弘・日野林俊彦・南徹弘, 幼稚園の屋内と屋外の遊び場面における幼児の仲間関係, *心理学研究*, 77 (1), 40-47, 2006
- 7) 大島みずき・中澤潤, 幼稚園進級児・新入園児混合クラスにおける仲間関係の縦断的变化, *千葉大学教育学部研究紀要*, 60, 115-119, 2012
- 8) 大島みずき, 進級・新入児混合クラスにおける幼児の仲間関係の形成, *群馬大学教育学部紀要: 人文社会科学編*, 69, 233-241, 2020
- 9) 前田健一・泉あかね, 幼児の仲間関係に関する研究－仲間相互作用の行動観察分析－, *愛知大学教育学部紀要*, 40 (2), 45-55, 1994
- 10) 前田健一, 仲間から拒否される子どもの孤独感と社会的行動特徴に関する短期縦断的研究, *教育心理学研究*, 43, 256-265, 1995
- 11) 前田健一, 幼児のソシオメトリック地位の長期的持続と変動－幼稚園児から小学5年生までの5年間比較, *愛媛大学教育学部紀要: 第一部(教育科学)*, 45, 205-117, 1999
- 12) 中澤潤・武内由布子, 幼児におけるネガティブ情動の表出制御と仲間関係, *千葉大学教育学部研究紀要*, 60, 109-114, 2012
- 13) 畠山美穂・山崎晃, 自由遊び場面における幼児の攻撃行動の観察研究－攻撃のタイプの性・仲間グループ内地位との関連－, *発達心理学研究*, 13 (3), 252-260, 2002
- 14) 磯部美良・佐藤正二, 幼児の関係性攻撃と社会スキル, *教育心理学研究*, 51 (1), 13-21, 2003
- 15) 畠山美穂・畠山寛, 関係性攻撃幼児の共感性と道徳的判断, 社会的情報処理過程の発達研究, *発達心理学研*

- 究, 23 (1), 1-11, 2012
- 16) 倉持清美, 就学前児の遊び集団への仲間入り過程, 発達心理学研究, 5 (2), 137-144, 1994
 - 17) 松井愛奈・無藤隆・門山睦, 幼児の仲間との相互作用のきっかけ-幼稚園における自由遊び場面の検討-, 発達心理学研究, 12 (3), 195-205, 2001
 - 18) 藤田文, 幼児の仲間との相互作用のきっかけ-仲間入りと仲間入れに着目して-, 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 53, 45-58, 2016
 - 19) 砂上史子, 幼稚園における幼児の仲間関係と物との結びつき-幼児が「他の子どもと同じ物を持つ」ことに焦点を当てて-, 質的心理学研究, 6, 6-24, 2007
 - 20) 松井愛奈, 幼児の仲間への働きかけと遊び場面との関連, 教育心理学研究, 49 (3), 285-294, 2001
 - 21) 湯沢正通・白川佳子・大山摩希子・石橋尚子・立元真, 5歳児による仲間の好きな遊びの推測と遊びの提案, 教育心理学研究, 39 (3), 288-297, 1991
 - 22) 田中浩司, 幼児の鬼ごっこ場面における仲間意識の発達, 発達心理学研究, 16 (2), 185-192, 2005
 - 23) 磯村正樹・鈴木裕子, 幼児期における対人理解と仲間関係の関連-5歳児における「他児の喜びを自らの喜びと感じる」姿に焦点を当てて-, 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 4, 41-49, 2019
 - 24) 浅賀万理江・三浦香苗, 集団保育場面における幼児のいざこざの意義に関する一考察-量的・質的分析の両面から-, 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 10, 55-64, 2007
 - 25) 岸俊行, 幼児期の「いざこざ」経験がその後の幼児間の関係に及ぼす影響, 福井大学教育実践研究, 42, 47-53, 2018
 - 26) 濱名潔・河口麻希・中坪史典, いざこざを経験した幼児はなぜ再び友だちと遊び始めたのか?-砂場で遊ぶ4歳児の事例分析-, 幼年教育研究年報, 39, 53-60, 2017
 - 27) 牧亮太・湯澤正通, 幼児の遊びにおけるからかいの機能, 保育学研究, 49 (2), 146-15, 2011
 - 28) 倉持清美, 幼稚園の中のものをめぐる子ども同士のいざこざ-いざこざで使用される方略と子ども同士の関係-, 発達心理学研究, 3 (1), 1-8, 1992
 - 29) 山本愛子, 幼児の自己主張と対人関係-対人葛藤場面における仲間との親密性および既知性-, 心理学研究, 66 (3), 205-212, 1995
 - 30) 高坂聡, 幼稚園児のいざこざに関する自然観察的研究-おもちゃを取るための方略の分類, 発達心理学研究, 7 (1), 62-72, 1996
 - 31) 山口優子・香川克・谷向みつえ, 保育園児のいざこざのプロセス, 関西福祉科学大学紀要, 13, 247-260, 2009
 - 32) 利根川彰博, 幼稚園4歳児クラスにおける自己調整能力の発達過程-担任としての1年間のエピソード記録からの検討-, 保育学研究, 51 (1), 61-72, 2013
 - 33) 水津幸恵・松本博雄, 幼児間のいざこざにおける保育者の介入行動-気持ちと和ませる介入行動に着目して-, 保育学研究, 53 (3), 33-43, 2015
 - 34) 本郷一夫・飯島典子・杉村僚子・平川久美子・平川昌宏, 「気になる」子どもの保育と保護者支援, 建帛社, 2010
 - 35) 本郷一夫, 保育の場における「気になる」子どもの理解と対応-特別支援教育への接続-, プレーン出版, 2006
 - 36) 佐久間庸子・田部絢子・高橋智, 幼稚園における特別支援教育の現状-全国公立幼稚園調査からみた特別な配慮を要する幼児の実態と支援の課題, 東京学芸大学紀要, 62 (2), 153-173, 2011
 - 37) 原口英之・野呂文行・神山努, 幼稚園における特別な配慮を要する子どもへの支援の実態と課題-障害の診断の有無による支援の比較, 障害科学研究, 39, 27-35, 2015
 - 38) 本郷一夫, 「気になる」子どもの社会性発達の理解と支援-チェックリストを活用した保育の支援計画の立案-, 北大路書房, 2018
 - 39) 本郷一夫・飯島典子・高橋千枝・小泉嘉子・平川久美子・神谷哲司, 保育場面における幼児の社会性発達チェックリストの開発, 東北大学大学院教育学研究科年報, 10, 199-208, 2015
 - 40) 前田健一, 仲間から拒否される子どもの孤独感と社会的行動特徴に関する短期縦断的研究, 教育心理学研究, 43, 256-265, 1995
 - 41) 法務省 出入国在留管理庁, 特定技能ガイドブック-特定技能外国人の雇用を考えている事業者の方へ-, <https://www.moj.go.jp/content/001326468.pdf>, 2020, 2022年1月20日参照
 - 42) 法務省 出入国在留管理庁, 新たな外国人材の受け入れ及び共生社会実現に向けた取組, <https://www.moj.go.jp/isa/content/001335263.pdf>, 2021, 2022年1月20日参照
 - 43) 法務省 出入国在留管理庁, 令和3年6月末現在における在留外国人数について, https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00017.html, 2022, 2022年1月20日参照
 - 44) 文部科学省, 「日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査(平成30年度)」の結果について, https://www.mext.go.jp/content/20200110_mxt-kyousei01-1421569_00001_02.pdf, 2019, 2022年1月20日参照
 - 45) 文部科学省, 外国児児童生徒受け入れの手引き(改訂版), https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm, 2019, 2022年1月20日参照
 - 46) Plenty, S. & Jonsson, J. Social Exclusion among Peers: The Role of Immigrant Status and Classroom Immigrant Density. *Journal of Youth and Adolescence*, 46, 1275-1288, 2017
 - 47) 中西由里・宮川充司, 日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する事例的研究(II)-入園当初3か月間の分析から・2歳児の比較-, 相山女学園大学研究論集, 25, 75-84, 1994
 - 48) 宮川充司, 外国人乳幼児の異文化適応過程に関する事例的研究(1)-中国人女児の事例-, 相山女学園大学

- 研究論集人文科学篇, 27, 125-141, 1996
- 49) 浜名紹代, 在日外国人幼児の仲間づくりについての一考察, 日本教育心理学会総会発表論文集, 34, 76, 1992
- 50) 越中康治・前田健一, モンゴル人幼児の異文化適応に関する研究, 広島大学心理学研究, 3, 127-136, 2003 (2022.1.24 受理)